

二人のおじさんボーイフレンドにさそわれて、〈遊女の滝〉に行くことになった。

わたしは、滝つぼのそばで池澤夏樹の「きみのためのバラ」を読みたいと思っていたので、デイパックに本と折りたたみの椅子をつめこんだ。

山中湖は山梨県のはじにあり、神奈川県にも静岡県にも近い。車に乗せてもらって約30分、わたしたち三人は、静岡県小山町の新緑の渓谷に分け入った。

おじさん二人は、即釣り糸を垂れて、寡黙な釣り人になる。

釣果がなくても、少しでもあたりあればすぐに場所を移動するので、わたしはその都度、椅子をかかえて、二人の後をついてまわった。

そのうち、やってみないかとうながされて、生まれてはじめて溪流に釣り糸を垂れてみた。10分たったかいなかで、「あらっ？」

「そのまま、あげてごらん」

「あらっ？」

「うん、かかっているよ」

「あら、まあ！」

無心は、ほんとうにこわい。気づいたら、自分の手元に18センチくらいのヤマメがかかっていた。

その後は、滝の飛沫を浴びながら、読書に専念。池澤夏樹のえがく都会のレストラン、ホテルの喧騒はすべて溪流の瀬音にすいこまれ、パリの街は透明な絵の中にたたずむ。

ふと顔をあげると、おじさん二人は、いつのまにか昭和の兄弟顔になって、夢中で釣糸をなげている。止むことのない滝のはげしさは音をつきぬけ、あたかも音をなくした山間の一点、釣り人の声さえ聞こえない。

そう、自分は、こういう静けさの中で本が読みたかった。